昭和42年2月24日国鉄東局特別扱承認新聞紙第490号
昭和40年3月8日第三種郵便物認可（毎月5日、15日、25日発行）

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆日本革命をアジア革命の勝利と
世界革命の突破口とせよ！
共産主義者同盟

5月25日
第98号
編集発行人　杉村宗一
一部20円
購読料
20回につき
二部　400円（〒共）
三部　700円（〒共）
三部以上一部に付300円

戦旗

戦旗社
東京都文京区湯島2丁目3－3（加藤ビル内）
電話代表（814）1635
振替（東京）26110
大阪支局
大阪市福島区鷺州上3－3（土質ビル内）（458）0235
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128－29　電（70）0025
名古屋支局（761）1938
静岡支局　静岡市音羽町114

☆反帝闘争の旗の下侵略と抑圧に抗し
生活と権利を実力防衛せよ！
☆プロレタリア永続革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！

5・28戦闘的デモで闘いぬこう

全学連・地区反戦の旗の下

全国青年学生総決起集会（滑走路前）へ

全都・全国の労働者学生諸君！五・二八砂川基地拡張阻止青年学生総決起集会に全力をあげて結集しよう！

職場で学園でつみ重ねた闘いの成果を今こそこの日に集中しなければならない。事態は、一刻も早く、多くの日本人民が決起することを要請している。

ベトナムの戦火は一段と拡大された。南ベトナム平定計画はもはや南ベトナム政府でもなく、ベトナム駐在アメリカ大使でもなく、正真正銘の米軍（ウェストモーランド）の手にゆだねられた。非武装地帯の進駐はその直後に敢行された。極東に存在する米軍基地はあの限られたベトナムのために総動員体制を布かれている。タイ・フィリピン・沖縄・グァム島そして日本国土の全ての基地がベトナム侵略に動員されている。この凶暴きわまりない支配階級の姿を誰が容認できるだろうか。日本の表玄関＝羽田国際空港はアメリカからの「招かざる客」（ベトナムへの空輸部隊）によって飛行機の発着数が従来の二倍にも三倍にも増えている。

彼ら支配階級にとって砂川基地拡張の必要はますます増しているにもかかわらず、彼らがなかなか「拡張の断」を下せないのは、闘いがすでに全国的に準備されはじめたからであり、地元反対同盟の「死んでも闘う」決意があるからだ。われわれの二・二六集会がきりひらいた局面はまさに闘いの全国化と闘いの戦闘化の端緒であった。

とはいえ、支配階級・政府は、ベトナム戦争の激化とともにどんなことがあっても砂川基地を拡張する決意を固めている。彼らは反対闘争の弱点を巧みにつかもうとしているのだ。

その弱点とは、社会党の闘争放棄と共産党のピクニック闘争・果敢に闘う者へのセクト的排除にあった。

青木、宮岡両氏がデモの先頭に

だがこのことによってわれわれの闘いは決して後退することはない。むしろ社会党、共産党指導下にあった労働者大衆は「いかなる闘いがいかにして準備されなければならないか」をまざまざとつきつけられたからである。

共産党指導部は地元反対同盟（農民）の戦闘性にも気おくれして例の「基地めぐり」に終始しようとしている。

社会党はこの闘いが鋭い対決（阻止か否か）という問題をつきつけられるが故に、とりくもうともしない。

五・二八闘争は二・二六闘争をひとまわり大きくした広汎な労働者と学生諸君の参加をえてかちとられるであろう。支配階級はまた棍棒とヘルメットで身を固めた数千の番犬＝機動隊を配置するであろう。だがそれこそ支配階級の焦りの表現であり、そのような強圧的弾圧はますます広汎な「拡張阻止の戦線」をきずきあげずにはおかないだろう。そして闘争から逃げまどう社会党、ピクニックに終始する共産党に対する大衆的つきあげの基盤が作り出されるだろう。六月、七月の労働組合本隊がとりくむための準備も、五・二八闘争如何にかかっている。

全都、全国の労働者学生諸君！総力をあげて砂川に結集しよう。自分の職場で、学園でひとりでも多くの「なかま」が参加するよう呼びかけよう。

そして機動隊がどんなに卑劣な暴力で妨害しようとそれに負けぬわれわれの戦列を組もうではないか。五・二八闘争を戦闘的デモで闘いぬき、砂川阻止への展望をきりひらこう。

砂川基地拡張実力阻止五・二八全国青年学生総決起集会
五月二八日、十二時結集、一時開会
立川基地北側滑走路前（拡張予定地）、立川駅下車、バス砂川四番下車

5.28　砂川基地拡張阻止現地闘争は、社会党・民同による闘争放棄と共産党のセクト的対応によって、当初予定されていた統一闘争の構想が崩れた。ここに三多摩反戦やわが同盟は急拠方針を検討し、2・26方式を前進させた「滑走路前青年学生総決起集会」を断固として決行することに決定した。

ここに、終始5・28闘争の統一のために誠心誠意努力を重ねてきた地元反対同盟の青木行動隊長、並びに宮岡副行動隊長にインタビューし、この間の事情と5・28闘争への決意を語ってもらった。（編集局員・芦川）

5.28　デモの先頭に立つ

地元反対同盟　青木行動隊長

（日）曜日の夕方とあって、青木行動隊長は、丁度風呂をあび、ひげを剃っているところであったが、記者が反戦青年委とともに闘っている共産主義者同盟の「戦旗」編集局員であることがわかると喜んで応待してくれた。

まず青木さんは、五・二八闘争に取組んでいるわれわれに対し、「どうもご苦労さん、反対同盟全員心から力強く思っています」と前置きして次のように語った。

「今回の統一行動は心ならずも不可能になってしまった。しかしあなたがたの集会（滑走路前青年学生総決起集会）には全力をあげて協力します。現に、当日の集会場所の確保（私有地の使用）、デモコースの許可申請にいたるまでなんとか妨害しようとする警察と交渉して認めさせました。その際警察当局は、広場の使用を、混乱を避けるという理由で一つの団体にしか認めないといってきたので他の団体には貸さないということで、反戦が使用するようとりはからってきました。」と、この間の氏の努力の一端を説明した。

このことは、同時に中央実行委員会側（日共）の集会場所が宙に浮いてしまったことを意味する。

そして更に青木さんは「若い人達が全国から集まってくるというのでね」と付け加えた。社会党や共産党のセクト的態度、闘争の私物化に対して、青年労働者や学生の真の闘う意志に対し、限りない親しみと、かつての砂川闘争から現在まで脈打っているわれわれと地元農民（反対同盟）との連帯感をこの短い言葉の中に秘めているように思われた。

そこで記者は「青木さん、五・二八闘争のデモ指揮の先頭に立たれるそうですが本当ですか」と質問した。

「総指揮といわれると困りますが、私の責任において集会場所やデモコースをとってきたこともあり、デモの先頭に立って最後までやりたいと思っています。まあ総指揮をやるといってもいいでしょう。」と言って愉快そうに笑った。そして急に真顔になって「正々堂々と整然たるデモをやろうじゃありませんか。今度は〝正々堂々〟と整然たるデモをやって偉大な大衆的発展の不動の基盤を築こうではありませんか。」と力をこめて語った。

青木さんのこの決意と提案は、この間様々な意見のちがいを乗りこえて、なんとか統一行動を成功させ、かつ、かつての砂川闘争よりもっと大衆的・全国的闘争として発展させていこうとする慎重な配慮があった。そして、それは中央実行委からの暴力デモ挑発分子といった不当な非難、またデモ隊の数を圧するようなものものしい機動隊の「鼻をあかしてやろう」という青木さんの意志でもあるのだ。

5.28　一万名集会実現させよ

地元反対同盟　宮岡副行動隊長

（記）者は青木さんと五・二八での再会を約して次に地元反対同盟の副行動隊長でもあり、この間の一切の交渉にあたってきた宮岡さんに面会を求めた。

宮岡さんは、今日は〝休養〟であると称して畑仕事に精を出していた。オンボロの麦わら帽子をかぶって鋤をふるっている宮岡さんの姿をみた記者は、この姿こそ反対同盟の闘いを支えている不屈の源泉ではないだろうかと強く心をうたれた。ベトナム戦争反対の強烈な思想と、休養と称して鋤をもつ農夫の姿、これこそ日本の歴史をつくる〝革命者〟の一つの真実の姿ではないだろうか。

記者の求めに応じて鋤を片手に立ち上った宮岡さんの頭上を、米軍輸送機が轟音を残して飛び立っていった。

「私は五・二八闘争の統一の努力を、五月二八日までつづけます。」と開口一番、こう語った。

「しかし、五月十九日の段階で、統一行動への構想が崩れたことは本当に残念です。この第一の原因は、共闘を呼びかけた中央実行委員会の受入れの〝枠〟がやや狭かったのではないかと思います。」と、端的に今回の統一闘争が不可能になった原因を指摘した。

いうまでもなく、社会党や民同の闘争への意欲の欠如が一つの大きな原因ではあるが、まがりなりにも〝前衛〟を称する共産党とその中央実行委員会が、社会党とその行動をともにしている東京地評の参加を万難を排しても実現させるように配慮すべきであったという言外の意をこめてこう語った。

「十年前砂川闘争で血を流した部隊は全学連と東京地評の労働者だったのです。」つづけて「中央実行委員会が十一者共闘に固執し、それが容れられないとして単独集会をとるならやむをえない。しかし共闘を提案したものとして、また本当に労働者・学生の統一集会を望むならば、そのような理由で統一行動を放棄することは道理が通らないではありませんか。」

「また、反対同盟としても、全体の統一を全力を挙げて推進してきた立場から、単独では困る。どうしてもやるなら砂川でなく横田でやってほしいと中央実行委に要求しました。」これに対し、中央実委側では極力反対同盟の説得につとめ、単独集会に参加を要求したが「安保への対決」という一点で大衆行動の統一をはかれないような集会には参加できません。反対同盟はカイライではありませんからね。」とたんたんと話してくれた。

最後に宮岡さんは笑いながら「こちらも負けないように五千といわず、一万名集会をやりましょうや、いや絶対にできますよ」と語り、丁度居合せた三多摩反戦の斎藤氏とともに五・二八、一万名集会を約して終った。

統一集会の危機に際し訴える

六・一五安保記念政治集会の圧倒的成功のために

共産主義者同盟政治局

全国の戦闘的労働者学生諸君！

六・一五安保記念政治集会は目前にせまった。今年もまた、多くの戦闘的労働者・学生諸君は革命的左翼の両組織を中心とした統一記念政治集会が開かれるものと期待していたことと思う。

事実、昨年の六・一五集会以降共産主義者同盟、革共同全国委員会、六・一五救援会、六・一五被告団等で組織されていた事務局では毎月一回討議を重ねてきた。特に本年五月に入ってからは、今年も六・一五集会を統一して開くために再三にわたって具体的な準備が進められてきた。

しかるに、五月二〇日に至り、突然革共同は「今年の集会は趣きを変えて政党を除いてやりたい」としてこれまでの統一集会を破壊し分裂集会の口実を作りだした。

われわれは従来のいきさつからいっても、労働者や学生諸君の期待からいっても、統一集会を開くべきであるし、六・一五被告団・救援会・全学連はもちろんのこと、集会に実際上の責任を持つわが同盟および革共同の両政治組織が一緒になって、準備し運営すべきであることを主張した。また政治集会の内容においても単なる各界の挨拶やアトラクションに終らせることなく、今日労働者階級が直面しているベトナム闘争、砂川闘争七〇年安保への闘う決意を折りこんだものにすることを述べてきた。

しかるに今回の事態は、従来あった事務局を破壊するものであり、組織的にも、内容的にも、非政治的なものにしてゆく、革共同の脱落以外のなにものでもない。

このように誰が考えても、当然の主張であるわが同盟の見解にたいし、革共同は一方的に会議を打切り、以後われわれの誠意ある話し合いの申入れにたいしても言を左右にし、他方では彼らだけの分裂集会を強行しだした。

わが同盟は、六〇年安保闘争を闘った革命的左翼の共通の遺産である六・一五安保記念政治集会の圧倒的成功のために、最後まで闘うであろう。

一九六〇年、岸内閣と資本家階級は、より一層軍事同盟を強化するため、安保条約の改訂を強行してきた。労働者階級と学生諸君は「日本帝国主義の侵略と抑圧政策安保批准を粉砕せよ！」の旗の下に、日本革命運動史上、画期的な大衆的政治闘争を闘った。だがこの闘いは決して平坦なものではなく、既成指導部社共の日和見主義によって幾度かの危機に見舞われた。この危機を救ったのは、血にうえた官憲の弾圧にも屈せず、英雄的に闘ったわが共産主義者同盟とそれに指導された全学連にほかならなかった。十一・二七国会構内突入闘争、一月の羽田闘争、四五、六月にわたる国会包囲の激しい集会・デモにおいて、全学連の闘いは労働者階級の勇気を鼓舞激励し、六・四ゼネストへとむかわせる原動力となっていったのである。

しかし、すべての日和見主義者達は、六・四ストを一つの跳躍台として止まるところを知らず前進する労働者大衆の闘いに恐怖し、闘いを小ブル路線に追い込んで、「事態を収拾するため」全力をあげて活動しだした。

まさにこの時、六・一五全学連の国会構内大集会は、決定的危機にあった安保闘争に、一挙に突破口を切り開いたのである。この闘いにおいて、わが同盟の最も勇敢で最も有能な活動家、同志樺美智子は、群る官憲の棍棒と泥靴の下二十二歳の若き生命を奪われることになった。プロレタリアの若き戦士・同志樺のおどろくべき英雄主義と献身的情熱はわれわれの鑑とするものであり彼女の霊にむくい彼女の初志――プロレタリア世界革命を完遂する日まで、われわれは闘い抜くことを誓いあった。

六・一五安保記念政治集会は、このような歴史的意義を記念し、新たなる決意の下に闘いを誓いあって毎年もたれてきた。特に昨年の集会は、会場を圧する二千数百名の労働者・学生が参加し、安保以来の革命的左翼の戦線が労働運動・学生運動の中に不抜の地歩を築きあげてきたことを如実に示した。

六・一五安保記念政治集会の詳細については、次号六月五日発行の『戦旗』に掲載します。

現在、ベトナムをめぐるエスカレーションは極限状況にまで押し進められ、緊張は一段と激化し、佐藤反動内閣のベトナム戦への加担はますます強められている。安保体制再編強化の一環として、砂川基地拡張阻止の闘いは開始されている。七〇年安保再延長へむかって日帝のプログラムは現実に動き出している。これらの状況を考えるならば、六・一五安保記念政治集会の意義は増々重大であり、左翼諸潮流の統一行動の場として欠かせないものとなってきている。今日、残念ながら左翼諸潮流の統一行動は必ずしも十分になしえているとはいえない。それゆえわれわれは、数少ない残された統一行動の最も重要な場所として、また六・一五記念の本来の意味からいっても、この記念集会を期により多くの統一行動ができるよう最大の努力をはらってきたのである。このことがまた、日本階級闘争を真剣に考えている戦闘的労働者・学生諸君の熱望でもあり、われわれを支持してくれている左翼諸派の期待でもあることと信じて疑わない。

だからこそ、既にのべたごとく今年も当然、統一集会を両組織の責任において開くものと確信し、昨年集会場となっている九段会館の届出について事務局の一員である北小路君（革共同所属）が責任者になっても、異論をはさまず、共に準備を進めてきたのである。

このようにわが同盟が誠意をもって進めてきたにもかかわらず、六・一五を目前にして、突如、九段会館の届出に革共同員がなっているのを利用し、ニセの実行委員会をデッチあげ彼らだけの分裂集会を策謀しだした。このことは革命的左翼にあるまじき背信行為である。

このような背信行為を犯してまであえて革共同だけで集会を強行しようとするのには、それなりの背景がある。

それは、この六・一五記念集会を利用し、彼らの中にある内部危機を救おうという企図からなのである。つまり、今次地方選挙にあたり、革共同は、無原則的に美濃部を支持したり、都議や区議に無所属で立候補させるという右翼的議会主義選挙に埋没した。その結果、内部に異論が続出し、未だにこれを収拾できないでいる状態である。われわれはこのようなことが予測されたので、彼らに好意ある批判を再三おこなってきた。それにもかかわらず、彼らは耳をかそうとしないばかりか「美濃部が勝てば政治情勢に激変が起こる」（『前進』三二六号）と幻想をふりまいてきた。だがいっこうに激変は起こらず、皮肉にも彼らの組織に「激変」が起ってしまったのである。それゆえ、彼らは今次六・一五集会を彼らの内部固めのカンパニアに利用しようとしているのが、本当のねらいなのである。そのためには、従来通りの運営形式では、内容が鋭どく問われるので、あえて今回のようなクーデターに出たといわざるをえない。このように彼らは、階級闘争の利害より、自己の宗派主義を重んじ、囲い込みの手段に出てきたのである。だがこのようなセクト主義は労働者階級の前進の前に必ずや粉砕されてゆくであろう。

今日においても、共産主義者同盟とその下に指導された全学連の闘いを抜きにして、安保闘争を語ることはできない。このことは何人も否定できない事実である。

だからといってわれわれは六・一五を自分達だけのものとは考えていない。

安保闘争には、幾多の無名の戦士が闘い、傷ついていった。これらの英雄的労働者・学生諸君の尊い闘いの上に六・一五の闘いが築かれたものと思う。

それゆえ今年もこの意義を認めるすべての人達と共に決意を新たにし、共通の財産としてゆきたいと考える。

とくに革共同の諸君が労働者階級の利益のためにセクトを捨てて統一し、昨年同様統一集会をもつ方向に変わることを期待すると共に、統一の方向に彼等を再び向けさせるために最後まで努力し闘うつもりである。

われわれは、今年の「六・一五安保記念政治集会」が、昨年をはるかに上回る巨大な政治集会として実現されるために全力をつくす決意である。

是非われわれの真意に賛同される多くの諸君が、この集会の成功に向かって共に結集されんことを心から望んでやまない。

（五月二十五日）

社会党の闘争放棄　日共のセクト主義をのりこえ

砂川拡張実力阻止の展望を切り開こう

全都・全国の労働者学生諸君！アメリカのベトナム侵略と佐藤政府のこれに加担する策動に反対し、都下立川基地の砂川で、滑走路を拡張しようとする攻撃を実力で阻止する展望を切り開くために必死に準備されてきた5・28現地闘争は社会党・総評の闘争回避主義と共産党の実力闘争敵対路線・セクト主義によって、共闘体制が崩された。だが、われわれは急拠、体制を再確立した。五月二二日結成された「5・28砂川基地拡張阻止青年学生総決起集会実行委員会」は、全学連と各地区反戦の総力を結集して、砂川基地拡張阻止の展望を自ら切り開くために、全国の青年・学生に呼びかけることとなった。地元反対同盟の青木行動隊長・宮岡副行動隊長を先頭にしたわれわれの戦列は強化された。全都・全国の労働者学生は2・26闘争をはるかに上まわる動員をかちとって、機動隊の弾圧をはねかえし、戦闘的デモを闘いとり、砂川闘争の全国的突破口を切り開こうではないか。

5・28実行委　全国動員体制へ

五月二二日夜六時、立川市の三多摩労協会館で「5・28砂川基地拡張阻止青年学生総決起集会実行委員会」が結成された。この日、全学連（秋山・成島正副委員長）三多摩反戦とその下にある立川、八王子、保谷、武蔵野・三鷹の各地区反戦、都内では中央、港、品川、墨田、文京、板橋、豊島、杉並などの各地区反戦、さらに川崎反戦と社青同東京地本、共産主義者同盟と三多摩の大学自治会の代表など40名が結集した。三多摩反戦斎藤議長と全学連秋山委員長の経過報告に続いて、各地区反戦の5・28闘争の取りくみの現状報告力強い決意表明が行なわれた。全学連の全国動員体制と同時に、電通労研の仲間から、大阪からも北区反戦を中心に断固5・28に結集することが報告された。

とくに斎藤議長は経過報告の中で、「地元反対同盟の青木行動隊長、宮岡副行動隊長が滑走路広場の使用を認め、演壇をつくり、当日はデモの先頭にたって闘うという強い連帯の意志表示が得られ、これにまさる激励はない。彼らの熱い闘いの意志に完全に応える毅然たる闘いに起とう」とのべた。各地区反戦の代表は「共産党のピクニックデモでは闘えない」「2・26闘争以後の各地区集会の成果を結集し、砂川闘争の突破口を切り開こう」という力強い発言が続いた。

最後に集会は次のことを決定した。

一　集会の名称を「砂川基地拡張実力阻止5・28全国青年学生総決起集会」とする。

一　ここに結集した各地区反戦と全学連によって集会実行委員会を結成し、三多摩反戦と全学連が実行委員会の責任団体となる。

一　集会は五月二八日（日）12時結集、1時開会。

一　[illegible]4時に出発、コースは米軍立川基地正面ゲート[illegible]川駅前緑川とする。

以上にもとづいて実行委員会は全都全国の労働者学生に総結集することを呼びかけることを確認して成功裏に終ったのである。

社会党・地評　動員体制を崩す

社会党、東京地評は、十八日に至って、この日の5・28闘争の[illegible]者会議（社会党都本部、三多摩分室、日共都委員会、三多摩地区委員会、東京地評、三多摩労協・地元反対同盟）に日共が参加しなかったことを理由に、5・28闘争の全ての準備を全面中止し、戦線逃亡した。これは日共が社会党、三労等による七者共闘ないし、これに両実行委員会を加える九者共闘を提案したことに対して、さらに平和委員会、他の中央実行委員会参加団体二つを加えた十一者共闘を提案、さもなくば単独で決行することを表明したことに対して、社会党が責任を回避し、5・28闘争の一切を水に流してしまったということである。

共産党の[illegible]もさることながら、社会党・民同の闘争回避主義は、進行する労働運動右傾化の中で、いよいよ深まっている。[illegible]の最大の焦点は、全都労働者の抵抗＝東京地評が突き動かされるかどうかであったが、十九日の幹事会を目前にして、十八日に共闘不成立の事実をつくり、地評の責任は回避する形で逃げられてしまった。これによって三労協単独参加は不可能となったのであるが、このような社会党、民同の闘争回避は、多党化と美濃部都知事のもとで今後も深化してゆくであろう。五六年の砂川闘争と今次砂川闘争の最大の相違は、この既成指導部の姿勢にあることを、われわれはあらためて自覚する必要がある。今次闘争こそ、最も自主的な抵抗戦線＝地区反戦・全学連の主体的闘いにかかっていることを確認しなければならない。

日共孤立して　実力闘争に敵対

日本共産党は五月四日の地元四者会談（社会党三多摩分室、共産党三多摩地区委員会、三多摩労協、地元反対同盟）で自ら社共共闘を提唱しておきながら、これを踏みにじり、単独集会決行を宣言した。一七日に至って社会党・三労などの七者共闘ないし、九者共闘の提案にたいして十一者共闘（前述）を提案し、これが受け入れられない場合は中央実行委員会単独[illegible]労働者階級の唯一の階級的組織＝労働組合のなかで労働者自らの抵抗戦線を形成してゆくという革命党の原則を忘れたセクト主義である。

それはかりではない。彼らは実際には、「安保破棄、諸要求貫徹中央実行委員会」なるものの「呼びかけに応える」各単産、単組の5・28実行委員会を18日よりでっちあげ始めたが、その方針は「ベトナム侵略を阻止する」といって砂川基地拡張を絶対阻止するという方針をうすめ、結局は「基地周辺のピクニックデモ」を提起し、「トロツキストの挑発をあくまで阻止する」などといっている。56年闘争のなかでも地元農民の「条件派と統一せよ」と呼んだ彼らは今回早くも実力闘争に敵対している。

だが彼らは、現在完全に孤立した。地元反対同盟が、彼らの一方的共闘拒否の態度に怒りをもって応えたからである。反対同盟は、二〇日朝「中央実行委員会の集会には、いかなる連帯も拒否すること」「滑走路前の[illegible]内におかれていた中央実行委員会現地事務局の退去を要求すること」などを決定し、中央実行委員会と反対同盟の交渉会も中止し、即日処置してしまった。

これにさきだって地元では十四日民青の街頭カンパ活動が行われたが、反対同盟にはまったくカンパしないなどのセクト主義が示され、二一日には恥知らずにも無断で区民館のカギをもち出し、中央実行委員会の全国代表者会議を開くなどの暴挙に出て、反対同盟からの孤立を深めている。都心ではすでに単劣なデマが飛ばされている。即ち「反対同盟の青木行動隊長、宮岡副行動隊長らは権力に買収されている」というのである。だがこれは日共宮本体制の動揺を深め、自ら墓穴を掘るものとなるであろう。

[illegible]

アメリカのベトナム侵略と佐藤政府の加担に抗議し砂川基地拡張実力阻止の展望を切りひらくため5・28現地闘争に全力結集しよう！

公労協24スト中止

公労協の二四ストは中止された。

二四ストは、国労の四時間スト（全国八地本）、同じく動労の四時間スト（全国十カ所）、全逓の二十八郵便局半日スト等を軸に準備されたのであるが、結局、仲裁に待つこととなり、闘いは中止された。

裁定は、二十七日以後といわれるが、調停段階で公益委員案として出た「六・五％プラス三百円」に決められるといわれている。

この案でみると、賃上げ額は、平均賃金の高い国鉄で定昇込み五千八十九円、全電通で同四千六円となり、平均賃上げ率は、十一・六％となる。（民間賃上げ率、十三・一％）

二四ストの中止によって、今春闘は事実上、終幕をとげたが、ここで二四スト中止をめぐって若干の問題点を指摘しておこう。

第一に、現在、民間の十三・一％が「高額回答」であると評価されているが、資本の利潤の増大と比較するならば決して高額とはいえるものでないし、実際、今春闘におけるわれわれの要求額から比べても高額とはいえない。そして公労協は、この民間以下なのである。

第二に、民間は自主交渉・調停段階での結着をとなえ、各単組別にヒソヒソ交渉に終始してきた。しかも各単組とも、賃上げと引きかえに、かなりの取引（合理化協力等）をしてきたのである。そして、政府当局も、これに調子を合わせ、調停での結着を意図してきた。

すなわち、労資双方とも「円満ムード」をつくり、今後の労働運動のひとつの方向を打ちだそうとしたわけだが、結果はどうであろう。結局、調停での結着はできず例年通り、仲裁への移行となった。このことは、日本資本主義の動揺のなかで、話合い賃闘が困難になりつつあるという民同路線の限界を、端的に示すものである。対決は不可避であり、徹底した生活と権利防衛の実力闘争をかまえてのみ、われわれの前進があること、このことが、調停失敗ということによって、やはり端的に示されているといえよう。

第三に、われわれは公労協の今春闘が、全く他力本願（特に全電通全逓）であり、六・五％プラス三百円も、他単産に作ってもらった相場にしかすぎないことを指摘しなければならない。すなわち、出された回答は、民同のいう「話合い交渉」がもたらしたのではないということ、しかも、回答のための相場を作った民間の妥結額も資本のペースで作られたこと――これこそ今次春闘の内実なのである。われわれは、このことを明白に総括しておかねばならない。

なお、二四ストに対するわれわれの取組みをも含めて、一般組合員の対応、および今後の公労協労働運動におけるわれわれの課題については、改めて論ずる。

―戦旗社―

共産主義者同盟関西理論機関誌
烽火　号外　B5　￥一〇〇（〒四〇）
☆日本資本主義の展望と労働運動
☆労働運動の転機とわれわれの組織
Ⅰ教育労働者からの報告
Ⅱ電機労働者からの報告
Ⅲ鉄鋼労働者からの報告
Ⅳ繊維労働者からの報告
Ⅴ電通労働者からの報告
八木沢二郎
竹野敏
共産主義者同盟関西地方委員会発行

全日本青年教師集団機関誌
教育労働者戦線7
☆春闘と八賃―その情勢と展望
☆六月闘争を実力で闘おう
☆地方報告―東京・名古屋・大阪
☆神教組を弾劾する
松本滋
西沢のぼる
江原茂雄
￥五〇（〒二〇）

解放戦線の抗戦強化
米軍新たな軍事制圧戦略へ
―砂川闘争も戦線の一環―

「非武装地帯」および同地帯南方地域における激戦は陣地戦的様相さえ帯びた大規模な戦いとなり、南部デルタ地帯におけるゲリラ戦を中心としてきた戦局を大きく変えている。同時に、米軍の従来の軍事制圧戦略の行詰りと新たなエスカレーションに動いている。

拡大つづける ベトナム侵略戦争

南ベトナム北部戦闘の激化

解放戦線の最大の根拠地であるデルタ地帯侵攻に米軍が踏み切った狙いは、闘うベトナム人民を撃滅しその上で平定計画を行なうという、軍事制圧体制を、長期の物量戦によって保証しようとすることであった。だがベトナム人民の英雄的闘いは、この米帝の野望を許さず、デルタ侵攻は米軍にとってみるべき成果をあげていない。それどころか四月になって激化してきた南ベトナム最北部クアンチ、トアチェン両省の戦いはデルタ地帯における「索敵撃滅作戦」による米帝勝利の幻想を吹きとばした。

昨年七月来、ほとんど無制限の戦闘爆撃機の援護爆撃を伴って五千人にのぼる米海兵隊がこの地域で作戦を開始しその後兵力を大幅に強化したにもかかわらず、戦線はほとんど固定してきていた。そして四月に入ってクアンチ省の総攻撃即ち迫撃砲、ロケット砲を使ってのジオリン陣地をはじめとするクアンチ省内米軍拠点への攻撃という積極的攻撃に解放軍は立ち上っている。この北部二省については解放戦線側の主導権の下で戦いは激化したのである。そして米軍および南ベトナム政府軍の損害の大半はこの地域の戦闘から生じており、増大している。

これに対して米軍はサイゴン周辺およびデルタ地域での戦闘にあった軍団を北部戦線に移して、戦いの主導権を奪回しようとしてきている。だがこれは同時に解放戦線の拠点たるデルタ地帯における侵略軍を手薄にすることであり、彼らの平定作戦の失敗を告白することになっている。なぜならば、北部戦線への軍団の移動は単なる一時的処置として終らせることはできないからである。すなわち北部戦線における解放軍の攻勢が偶然的要因によるものでないからである。

米帝の軍事制圧路線に対抗し、ソ連がベトナムに対する武器補給の強化に踏切ったことが伝えられている。そして最近における解放軍の装備は百五十ミリを含む各種迫撃砲はもちろん、八十五ミリ、百ミリ、百五ミリ、百二十二ミリまでの野戦砲を常時使用できる態勢になり、さらに射程十六キロの百二十二ミリロケット砲も持つにいたり、地上戦での装備はほぼ米軍と互角になったといわれる。

このような両軍の激突は補給ルート要衝八八一高地争奪戦になる十一日間の死闘に典型的に示された。このような状況に対する米帝の対応策はより一層の兵力の投入という成算のない泥沼以外にはありえない。彼らの考える「名誉ある休戦」は現在において不可能である。

「聖域」を失った北爆

地上戦における以上のような状況は、北爆の拡大を不可避にしている。これまでハノイ、ハイフォン地区の中心部は「聖域」として米機の行動に制限が付されていた。だが最近におけるハノイ、ハイフォン地区中心部爆撃の強化は「ベトナム戦に聖域はない」とする米軍当局の見解を現実化させてきている。地上戦における先の状況は、米帝に和平の呼びかけと戦闘という二面政策をとる余地を与えていず、ソ連などとの多少の対立の増大を覚悟しても、軍事制圧戦略に賭けさせている。だが第二次大戦のヨーロッパ戦線をしのぐといわれる爆撃にもかかわらず、北爆は戦局を変化させてこなかった。そして撃墜される米軍機も増加してきている。北爆に出動した米軍機の75%はF105サンダーチーフ機であるが、米軍保有の同機種の半数以上が二年間のベトナム戦で失われたことが発表されている。

このようにして、「エスカレーション」を続けてきた北爆はいまだ成算なく、その上北ベトナムには拡大の余地がなくなりながらもそれに米帝は彼らの「勝利」への展望の大きな部分を求めずにはいられないのである。

砂川闘争はベトナム戦線の部分だ

成算なき米帝の軍事拡大方針は五月十八日の「非武装地帯」侵攻によって一つの頂点をつくり出した。これにより地上軍北進への入口に達し、北爆の拡大が中国領の三度の爆撃を生み出したのと対応し、重大な局面にいたっている。

この緊迫した戦局を背景に、米国内世論の対立もエスカレートしている。四月の反戦デモ以来の黒人公民権運動と反戦運動の結合、「ティーチ・アウト運動（戸別訪問による説得活動）」という運動の高まりは、いまだ少数派といえども、世論研究所のギャラップ博士が「ハト派がふえつつあり、戦争の早期解決が遅れればこの傾向はさらに強まろう」と推測しているように国内対立を激化させてきている。これに対し、米南ベトナム援助軍司令官ウェストモーランド将軍がワシントンに帰った際、反戦運動を「反愛国的」と決めつけたのは、兵力の投入の増大を唯一の「解決策」と考える帝国主義者にとって、徴兵によってそれを行なわざるをえない以上、徴兵拒否の闘いを強めている反戦運動は我慢のならないものとなっているのである。

このような帝国主義者の狂暴化した長期路線に対して、二カ年の沈黙を破ってラテンアメリカ革命の指導者チェ・ゲバラは「われわれは、二つのベトナム、そして、三つのベトナム、そして、数多くのベトナムをつくるべきであると主張しなければならない」と世界的反撃を呼びかけた。われわれがこれに答える唯一の道は米帝の共犯者である日帝との闘いであり、なかんずくベトナム侵略の後方基地をめぐる闘いである。

砂川基地拡張阻止の闘いは拡大されたベトナム戦線の部分であり、われわれはこれを実力阻止の闘いとしてベトナム人民と「運命を共にして闘う」のでなくてはならない。

世界と日本

フランスでゼネスト
―合理化策す緊急令に反対して

五月十七日に闘われたフランスのゼネストは戦後最大の規模の政治ストとなった。ドゴール政権の「経済社会政策に対する特別権限要求法案」に反対するこのゼネストは、共産党系のCGT（労働総同盟）、社会党系のCGTFO（労働者の力）、カトリック系のCFDT（民主労働総連合）、教員組合が組織したものである。

このストライキによってフランスでは電気通信がほぼ途絶しガスの圧力が落ち、交通機関の大半が麻痺した。さらにこの影響で商店、企業も休業状態となった。

三月の国民議会選挙で左翼連合・共産党が協定をつくり共同歩調でドゴール派と対決し進出をみせたこともストを成功させる要因となった。この協定を基礎に三大労組連合体が統一ストを組織した。フランスでこのような大規模な政治ストを統一して闘ったのはこれが戦後はじめてである。

特別権限要求法案の内容

ドゴール政権＝ポンピドー内閣が提出した「特別権限要求法案」は次のような内容をもっている。すなわち、来年七月完成のEEC関税同盟を控えて企業の集中、合併、合理化の促進、これに伴う失業問題の対策。第二に今年三〇億フランに達すると見込まれる社会保障の赤字解消、自己負担分の増加をはかることによる社会保障の削減。第三に企業の国際競争力強化のための法的措置、斜陽部門へのテコ入れ――などを骨子とする諸政策を議会の審議、決定をへずに政令によって実施する特別権限を要求したものである。

左翼連合・共産党はこれに対し、十七日のゼネストをバックに内閣不信任動議を提出したが賛成二三六で過半数（二四四）に達せず、特別権限要求法案は議会を通過した。

戦後体制の動揺

第四共和制時代の絶えまない政治的動揺のためにフランス資本主義の国際競争力は、EEC内最大の競争相手である西ドイツに比べ立遅れている。折しも六三年のアメリカ利子平衡税以来、ドル引揚による世界経済分断化傾向が深刻化し、フランス資本主義にとって国際競争力強化とそのための国内体制整備は死活問題になっている。

しかしこのための集中、合併合理化、賃金抑圧は、三月の総選挙にみる左翼進出に示されたように労働者大衆の不満を高めている。三月選挙の結果ドゴールは国民議会では過半数を上まわることわずか一議席にすぎない。しかも国内体制整備のための労働者階級に対する抑圧政策は彼らのみならず中間層（中道左派）をも離反させている。このためドゴール政権は議会での行詰りを予想せざるをえず、これを恐れて法令による措置を求めてきた。これはいわばワイマール末期ブリューニング内閣の緊急令にも比せられる性格のものであり、議会体制の手詰りを意味している。

三月選挙の結果にひきつづくこの事態は、ドゴールによってのりきられたとはいえ、フランスの戦後民主主義体制が動揺を開始したことを示している。

28闘争参加を確認
5・23大田集会

5・28闘争へ向けて改憲阻止反合理化大田行動委員会は、二三日、蒲田八幡神社で「ベトナム戦争反対、砂川基地拡張反対5・23大田青年労働者集会」をもった。この集会は、さきの4・27集会の成果のうえに、全金、金属、電機、化学、全国一般、土建、都職、全逓等各支部活動家九十余名を結集して行われた。

集会は、事務局の司会で始まり映画「流血の記録・砂川」を上映し、現地反対同盟青木良一氏から闘争報告をうけた。

この後の大衆討論では、5・28闘争に職場の大衆を結集し参加することを確認した。討論では、砂川闘争とベトナム闘争の関連、この攻撃の根源である安保体制の打破の政治的意義を、職場にどう入れていくかが検討された。まず政治闘争を労働組合にいかに呼びかけていくか、次に日共が指導権を握っている組合で、日共の方針に対決し、5・28実力闘争にいかに職場大衆を結集するか、が問題となった。また全金傘下の組合で、執行部や青年部を握っている支部、上部団体に加盟していない組合で執行部や青年部を握っている場合、握っていない場合、それぞれの具体的状況の中で対応する具体的戦術問題までが検討された。

東京都西部地区
「戦旗」読者会
六月二十五日（日）
十二時―午後五時
（詳細は戦旗社へ）

百二〇名が集会デモ
5・20高校生砂川集会

五月二〇日、社会文化会館に東京都の先進的な高校生一二〇名が結集してベトナム・砂川阻止の集会がひらかれた。

地元反対同盟の青木市五郎氏の闘いの決意と支援要請をうけた後勝利の記録「砂川の闘い」の映画上映があり、各校代表の闘いの連帯のあいさつで集会は終了した。

この後、国会議面前―虎の門―新橋―東京駅のコースに向ったデモは、警官と刑事の卑劣きわまりない弾圧にも負けず、集会参加者の全員をもって行なわれ、手に手にプラカードを掲げ、アメリカのベトナム侵略阻止、砂川基地拡張反対、佐藤内閣の加担阻止のシュプレヒコールとインターを声高らかに叫び、高校生の闘う部隊としての姿を示した。アメリカ侵略軍がベトナム非武装地帯に進攻した直後に行なわれたこの集会とデモのもつ意義は高く評価される。

この闘いを通じ明らかになったことは、第一に今まで運動の主体が労働者・大学生であり、現在高校生が政治問題に関係することは罪悪視され弾圧されてきたが、これをはねのけて、去る二月の紀元節阻止闘争以後徐々にではあるが高校生が現実の政治的行動に自分を位置づけ、侵略と抑圧に抗する闘いにたち上る新しい部隊として戦列に加わりつつあること。第二にその核が、教育を通じて画一化され自己の主体性を圧殺されてきたといわれている都内の各高校のなかに生まれつつあること。第三に反戦高協が上部中核派の誤った高校生運動の方針のために、大衆運動を放棄し、組織防衛に汲々としていること。その結果、この集会を主催した共闘会議から召還し集会にはほとんど参加しなかったこと。これによってもはや彼らによる運動の拡大は望めないこと。第四にこの集会を責任をもって牽引した高校生会議はこの成果をさらに高め、今後教育の反動化と生活、権利の剥奪を学園で積極的に訴え、これとベトナム侵略に対する佐藤政府の加担、基地拡張との関連を明らかにし、さらに一層高校生を結集してゆくこと――これらを教訓・課題として前進することが要求されている。

二千の学生を結集
専修大学館・部室闘争

【専修大分局発】部室とりあげ攻撃に端を発した専修大学の「学館・部室闘争」は、連日一千～二千名の学友を結集し、社学同専大支部の指導のもとに闘われている。

部室とりあげの攻撃にたいし、専大の民青諸君はあいも変らずこれを「要求」闘争におし止め、千余の学友の巨大なエネルギーを文字通り改良の枠のなかに圧殺しようとしている。またML派は「教育問題」を提起して結局のところ「あらねばならない教育」の姿を夢想し、おしつけるという有様で民青とともに両極の日和見主義としてたち現われている。

これにたいし、われわれ自治会に全責任を負う専大主流派は、現在の改良闘争のもつ深い意味を、明大闘争の敗北の苦しみのなかから学び教訓化し、さらに深めて、数千学友のエネルギーに依拠し、これを爆発させるため、闘っている。部室・学館をかちとり、当局の大学支配と闘うなかで政治闘争との結合をかちとり、大学における永続的な闘う部隊の組織化を中心任務としている。

われわれは、この闘争を、秋に予想される学費闘争の前段階として最後まで闘いぬき、秋の学費闘争へと結合し、全学連学費闘争をわれわれのヘゲモニーによって推進させてゆくであろう。

二〇日、学長にたいして公開質問状、団交要求が発せられた。これが拒否されるならば、われわれは全能力、力量を傾注し、実力闘争で闘いぬく決意である。

× × ×

職場を基礎に合理化粉砕へ
三菱重工の「新従業員制度」（下）

公然たる賃下げと差別支配

「新制度」への取組みは、民社御用路線の重工連合（第二組合）はもちろんのこと、全造船三菱支部も「新制度」に立向う姿勢は著しい立遅れをしめしている。三十一年に旧三菱支部が民主化闘争として職工員の諸格差撤廃を会社側に要求したことにたいする回答として「新制度」を受けとめるという実感が、組合員にほとんど失なわれているのが実情である。「新制度」のための会社側の職場における諸調査（ききこみがほとんどの刑事版だが）は何ら抵抗も受けずにまかりとおっており、職場の大衆は不安を抱きつつもそのねらい、内容が判らぬため反撃への手がかりさえつかめぬところに追い込まれている。会社側は、「新制度」の説明はもちろん、従業員に一片の資料すら配布しないのにたいし、御丁ねいにも重工連合は、「会社提案の骨子」と題して会社回答をベタ写したパンフを発行してPRを買って出て会社側のコスト低減に血税ともいうべき組合費をつぎ込んで協力し、いたるところにとげのあるバラ色の夢を（「新制度は実力主義の労務管理」だとフレ回っている）振り撒いて組合員を迷路に誘いこんでいる。だが一定の賃上げの代償として賃金体系や職場機構の改変が激しい状況のなかでは、対決点を組合員大衆にはっきりと提起するために、問題点の分析に相当のエネルギーを必要としているのだ。

ところでこの「新制度」は、流行の「職務分析」なるものを使ったエセ科学的なシロモノであり、新たな差別支配を目指すものにほかならない。なぜならその内容は「仕事の難易により毎年の昇給額を決定する。したがってむつかしい仕事をやっていても進級しないといつまでも昇給しない」仕組みになっているからである。したがって、この「新制度」にたいするわれわれの対決点は、つぎの点にあるであろう。①新制度は仕事の難しさで人を評価すると称して若い働き手に幻想をあたえつつ（だが実際は、勤続年数が最終的な決め手となるから、若い優秀な人間でも簡単には上へ行かれない）、また他方では労務構成上問題となる高年令層を仕事で評価することで低ランクにし（高年令層は仕事の内容で比較されたら、バリバリの若手よりもずっと点数が低くなるのは明らかだ）、こうして低コスト体制、長期的賃金凍結体制を目指すものであること②末端職制が組合員の仕事の評価決定を受けもつことにより、組合員の分断・締めつけが強固になり組合組織そのものが破壊されること、にある。

大衆闘争への展望

電気産業における仕事別賃金導入に対する闘争後に現われたように、この種の新労務管理体制に対する闘いは、組合が対案をもたねば闘えないとする総括がジャーナリスティックに行なわれているがわれわれは決してそうは思わない。代案や修正案を考えること自体が、大衆闘争への展望を見失う原因となる。われわれはいかなる方法をもって展望を切り開くか。答えは次の通りになるであろう。

"労働者にとって最大の問題を大衆的に暴露すること"、すなわち労働者に不利なものを徹底的にたたきつぶすことである。修正案では問題にならない。

職場での拠点確立を

「新制度」の問題点を把握したら、職場での闘争のエネルギーをいかに引出すかである。われわれは全国十五にまたがる事業所にビラとパンフを全ゆる方法で（直接手渡す、本屋で発売、ダイレクトメール、通信販売等々）浸透させている。会社と民社ご用幹部の統制の下で、この浸透作戦がどこまで達成されるかがわれわれに課せられた重要な問題である。その後は大衆の反応をみ、あるいはわれわれが煽動し各工場単位で職場集会を組織し無能な執行部を職場集会に引きずり出し、彼らを吊し上げると共に、「新制度」の導入の採否を全員投票に持ち込む圧力をかけてゆかねばならない。民社御用組合の共通した組合運営方法は「よらしむべからず、知らしむべからず」の徹底した秘密主義と官僚統制にあり、これを打破し得るか否かが全ゆる闘争の鍵なのである。大衆的な職場集会を開かせて直接民主主義を勝ち取ることが「新制度」粉砕にも結びつくのである。われわれにとって有利なことは、会社側の徹底した秘密作戦で重工連合（第二）の幹部すらも「新制度」のねらい・内容を知らされていないことである。

われわれはこれを最大限に利用して執行部を突上げ職場大衆の動揺と意識化を引起しそれを「新制度」の粉砕へと結びつけてゆくため全力を投入する覚悟である。四三年の春実施を完全防止するだけでなく、逆に諸格差の撤廃を要求する闘いを組めるよう重工労働者の奮起を促がし、われわれはその最前線で闘っていることを報告して終りたい。（長島冬彦）

なおこの問題にとりくんでいる「三菱重工の組合を強くする会」から「三菱重工に現われた新従業員制度とは何か」という三七頁のパンフレットが発行されました。各地の反合闘争での格好の資料です。（七〇円・〒三〇）。戦旗社へ申込んで下さい。

28に向け二百結集
砂川阻止静岡集会

共産主義者同盟静岡県委員会、社学同静岡大学支部、静岡教育研究会など後援の「五・二〇砂川基地拡張阻止静岡集会」は、二百名の先進的労働者学生を結集して五月二〇日夜、静岡市中央公民館一階ホールで開かれた。

集会は実行委員会を代表して岡本氏（共産主義者同盟静岡県委員会）の基調報告のあと、映画（砂川）を上映し、続いて砂川現地反対同盟の宮岡副行動隊長が闘い決意をこめて連帯のあいさつをおこなった。とくに五月二八日の現地実力闘争を社会党が放棄し、共産党がセクト化したことにかんし、宮岡さんは全学連、反戦青年委、先進的労働者の実力闘争に期待すると述べた。

最後に静岡教労研、民主商工会、静岡教育研究会、静大文理学部の各代表が闘う決意をのべた。

この五・二〇静岡集会は、静岡の先進的労働者、学生、大衆的政治組織がはじめて統一行動に結集し闘う統一戦線を結成した点できわめて重要な意義をもっている。この集会に結集した部分は、静大学生を中心として28現地闘争に大挙して結集すべく準備をすすめている。

中央反戦「映画と討論の夕」
砂川をめぐって八〇名が熱心に討論

五月一六日夜、中央区の反戦青年委員会（準備会）が企画した「緊迫する砂川問題を知る映画と討論の夕べ」には、区内の八〇名の青年労働者が結集し、成功裏に終った。集会は「流血の記録・砂川」を上映したあと、砂川基地拡張反対同盟の宮岡副行動隊長が講演した。

宮岡氏は①砂川闘争はベトナム侵略阻止の闘いである、②砂川闘争こそ安保体制との闘いであり勝利の可能性をもっている、③それは唯一、実力闘争以外に道はない④社共両党は安保打破といっているが現実的行動はその政策を裏切っている。自己の政策に忠実な新らしい政党をつくらねばならない等を強調し、参加者の鋭い質問に応えられた。集会は最後に望月事務局長が「5・28闘争を準備しよう」と力強く訴えたのちインター斉唱をもって5・28の決意を固めて終った。

全同盟員が『戦旗』購読者を一人獲得しよう

共産主義 第10号
B5、128P　予価250円　6月10日発売

☆砂川・小選挙区と70年安保への闘い　共産主義者同盟政治局
☆「産業政策」と労働運動――当面する話題は何か　労対部
☆67年学生運動の任務　学対部
深化する日本資本主義の動揺と国内攻撃の現局面　狭山禁治・永井優
ヨーロッパ不況の歴史的意義とヨーロッパ政治体制の動揺　杉村宗一・笹原安夫
東交労働組合と日本階級闘争　仏徳二
特集・階級形成と前衛党
　階級意識・階級形成・戦略戦術　水沢史郎
　職場抵抗闘争と現代革命　佐々木和雄
　社青同解放派の観念性はどこからくるか　北田馨
　革共同中核派の観念性はどこからくるか　早川勝
構改派民主主義の市民的性格　正木真一
シンポジウム・中国―文化大革命か社会大革命か

戦旗社取扱
☆教育労働者戦線7（全日本青年教師集団機関誌）　〒共60
☆三菱重工にあらわれた新従業員制度とは何か（三菱重工の組合を強くする会編）　70〒30

マルクス主義の学習　連載　第四回

帝国主義世界戦争とプロレタリア世界革命

レーニン『帝国主義論』

▼レーニン主義と『帝国主義論』

これまでわれわれは、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』が革命綱領の古典的な原型をなし、さらにそれが『資本論』によって科学的に裏づけられ、真の科学的社会主義として確立されたことをみてきた。

だが、プロレタリア世界革命の現実の基盤は、マルクスの死後、帝国主義時代の到来をもって初めて歴史的に提起されたのであった。第一次帝国主義世界戦争の荒廃の中からロシアの地に社会主義国が誕生したことはこれを明白に物語っている。そして同時にロシア革命の成功はレーニンとボルシェヴィキの卓越した政治指導なくしては決してありえなかったであろう。ここにこそ「レーニン主義とは何か」が新たに問われねばならぬ根拠がある。

のちにスターリンは『レーニン主義の基礎について』という論文の中で、次のように述べている。すなわち「レーニン主義は帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である。もっと正確にいえばレーニン主義は、一般的にはプロレタリア革命の理論と戦術であり、特殊的にはプロレタリアートの独裁の理論と戦術である」と。この定義自身は正しいといえよう。だが問題は、レーニン主義が、いかなる意味で「帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義」たりえたのか、ということである。レーニンの鋭い戦略・戦術は、いかなる科学性に裏づけられていたのか――この点こそ、真に問われなければならない。

ここに『帝国主義論』の重要な歴史的意義が浮かびあがってくる。まさにレーニン主義とは『帝国主義論』をとおして初めて確立されたのであった。そこでわれわれは、レーニン主義自身が確立されていく過程を、まず見ておこう。

▼二段階革命論からプロレタリア革命論へ

まず最初の段階は、いまだレーニンが第二インターの思考様式の限界にとどまっていた段階である。すなわちロシア社会民主党の一九〇二年綱領は、最大限綱領＝窮極目標としての社会主義革命、最小限綱領＝当面の実践的任務としてはツアー制度打倒、八時間労働制などを実現するためのブルジョア民主主義と設定されていた。いわゆる二段階革命論にとどまっていたのである。それはドイツ社会民主党の「エルフルト綱領」と全く同様に、窮極目標たる社会主義革命と当面する具体的任務とが形式的に分断され、具体的革命プログラムとはなりえていなかった。

この時期にレーニンが対決したのは、まずナロードニキであった。ナロードニキは、近代的プロレタリアートの登場に目をつぶり、ロシアに残存している農村共同体に依拠して"農民社会主義"を主張した。これに対しレーニンは『ロシアにおける資本主義の発達』などの著作で農村の資本主義的・ブルジョア的発展を強調することによって封建遺制を一掃するためのブルジョア革命を具体的任務として掲げ、プロレタリア社会主義を窮極目標として対置したのだった。

この論争に続いたのが、メンシェヴィキとの党派闘争であった。メンシェヴィキは、ロシアにおける資本主義の後進性、プロレタリアートの未成熟を強調し、「ロシアには社会主義の物質的基盤が存在しないが故に、プロレタリアートはブルジョアジーと同盟し、ブルジョア民主主義的改革を行なうにとどまるべきだ」と主張した（マルチノフ）。これに対してレーニンは革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーをあくまで強調し、反論を加えたのである。すなわち「プロレタリアートは農民と同盟し、この労農同盟による民主主義的独裁をとおして、民主主義革命を徹底的に遂行せよ」と。

ところで『社会民主党の二つの戦術』の中で展開されているこのレーニンの「労農民主独裁論」は、一九〇五年革命の実践的経験を通して、すでにレーニンが第二インターの思考様式から脱却しはじめたことの明白な証左であった。というのは、トロツキーも指摘しているとおり、レーニンの「労農民主独裁」は、その政治力学の展開からして、自ずとプロレタリア社会主義への発展転化にならざるをえないからである。いわばこの段階におけるレーニンは、いまだ言葉では二段階革命に固執しつつも、実際はプロレタリア社会主義を真正面から提起する「一段階革命論」への移行を開始していたのである。

そしてこのレーニンの限界を真に打ち破る契機は、ほかならぬ第一次世界大戦の勃発と、それをめぐる第二インターの歴史的裏切り行為であった。

▼第二インターの歴史的裏切り

一九一二年、第二インターは「バーゼル大会」において有名な反戦決議を採択し、「資本主義の崩壊をはやめる」ために戦争の危機を利用することまで確認した。ところが第一次大戦が勃発したとたん、この決議は頭から忘れ去られ、第二インターはドイツ社会民主党を先頭に、「祖国防衛」と称して次々と戦争協力に転換したのである。いうまでもなく、この第二インターの歴史的裏切り行為は、レーニンを激怒させずにはおかなかった。

だがこの裏切りは、ドイツ社会民主党の「エルフルト綱領」の重大な欠陥と、それに基ずく第二インターの徹底した改良主義路線の必然的結果にほかならなかった。加えて、第二インターの「理論的指導者」カウツキーらは、帝国主義戦争の本質を全く見誤り、ロシアを戦争の「張本人」に仕立てて自らは完全な排外主義者へと転落したのである。

こうしたなかでレーニンの『帝国主義論』はカウツキーらの日和見主義理論を粉砕するために、亡命先のチューリヒにおいて書きあげられた。だが本書のもつ意義は、これだけにとどまらない。レーニンは、カウツキーの「超帝国主義」批判をとおして、自らの世界革命戦略を完成し、それまでの第二インター的思考様式からも訣別することになったのである。

▼世界戦争・世界危機・プロレタリア世界革命

『帝国主義論』は十章から成っているが、まず最初の三章（「生産の集積と独占体」「銀行とその新しい役割」「金融資本と金融寡頭制」）では、各国における産業の組織的独占体と巨大銀行の成立、そしてその融合体としての金融資本の確立が説かれている。これに続く三章は、金融資本の確立の必然的産物としての過剰資本が国外に輸出されることをとおして、これが諸列強による世界の領土的分割にまで発展せざるをえないことが確認される。しかもその分割は、列強間の不均等発展をとおして、「再分割戦」をひきおこす。これこそ帝国主義戦争を必然化したものだ、とレーニンは結論するのである。かくてレーニンによれば、第一次世界大戦は「どちらの側から見ても帝国主義戦争（すなわち、侵略的略奪的、強盗的な戦争）であり世界の分けどりのための、植民地や金融資本の『勢力範囲』等々の分割と再分割のための戦争であった」。

そればかりではない。「戦争によってつくりだされた世界的荒廃の土壌の上に、世界的な革命的危機が成長している」（仏語および独語版への序言）ことに、レーニンは注目した。ここから生まれる世界革命戦略こそ「帝国主義戦争を内乱へ！」のスローガンにほかならない。この「世界戦争→これによってひきおこされた世界危機→世界革命」の戦略は、マルクスにおける「世界恐慌→世界危機→世界革命」という永続革命と軌を一にするものであり、第二インターによって忘れさられた世界戦略の輝しい復活だったのである。それはもはや、抽象的な二段階革命論ではありえない。帝国主義世界戦争による具体的な危機を媒介とした、具体的なプロレタリア世界革命のプログラムなのである。

▼十月革命とレーニンの戦略・戦術

一九一七年二―十月にかけてのレーニンの戦術指導はまさにこの世界危機論に基礎づけられて展開されたものであった。すなわち、人民大衆の切実な要求を「即時講和、土地の無償分配、十人の資本家大臣を追放せよ」のスローガンに集約し、これをもってメンシェヴィキや社会革命党を下から徹底的につきあげその日和見主義を暴露し、それをとおして広汎な人民大衆をボルシェヴィキの下に結集することこれである。この戦術こそ、それ自体では民主主義的改良的要求にすぎぬスローガンを、最後の瞬間にはプロレタリア革命のスローガンに転化させうる唯一の戦略・戦術であった。実際ロシアにおける危機の深化は、広汎な人民大衆をメンシェヴィキ、社会革命党への幻想から解き放ち、ボルシェヴィキは圧倒的大衆の支持のもとに十月革命を成功させえたのである。

こうしてレーニンは十月革命の実践の中で、世界戦略（世界危機論）とそれに基ずく過渡的戦術、というプロレタリア永続革命の戦略・戦術を完成させた。ロシア革命の成功の基礎はここにあるのであり、またレーニン主義の根本もここにあるといわなければならない。

しかしながら、このレーニン主義の重大な根本は、コミンテルンによって忘れさられた。スターリンの「全般的危機」という抽象的危機論は、ヴェルサイユ体制崩壊の真の意味を見失わせ、今度はコミンテルンをしてかっての第二インターの二の舞を演じさせることになった。

ここにわれわれは、世界危機を鋭く把握することが革命党の実践にとっていかに重大な意味を持つかを知ると同時に、現在における真のレーニン主義の復活を、われわれ自身の使命としなければならないのである。

赤崎次郎編
全電通労働運動史年表
〒共50円